

説教題 「『悪い思い』とは？」

聖書箇所 マタイによる福音書9章1節—8節

「(1)イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰って来られた。(2)すると、人々が中風の人を床に寝かせたまま、イエスのところへ連れて来た。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される』と言われた。(3)ところが、律法学者の中に、『この男は神を冒瀆している』と思う者がいた。(4)イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。『なぜ、心の中で悪いことを考えているのか。(5)《あなたの罪は赦される》と言うのと、《起きて歩け》と言うのと、どちらが易しいか。(6)人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。』そして、中風の人に、『起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい』と言われた。(7)その人は起き上がり、家に帰って行った。(8)群衆はこれを見て恐ろしくなり、人間にこれほどの権威をゆだねられた神を賛美した。」

本日のテキストの9章2節で「中風の人」と訳されている言葉は、ギリシャ語ではパラルティコスです。パラは「片側」を意味し、ルティコスは「弛緩した者」を意味しますから、合わせて「体の片側が弛緩して、半身不随になった者」というほどの意味になるでしょう。なお、この半身不随の人については、ただ「半身不随の人」とあるだけで、彼の人となりについてのそれ以上の説明はありません。彼に家族がいたのか、友人がいたのか、どんな家に住んでいたのか、生活費はどうしていたのか、何も分りません。彼は、ただ、運んでこられて、癒されるためだけに登場しています。そして、2節にはこの人が「床に寝かせたまま」つれてこられたとあります。この「床」という言葉の原語は「クリネ」という語が用いられています。「クリネ」は、ほぼ現代と同じようなベッドを意味するようです。この「クリネ」について、たとえば平凡社の『世界大百科事典』は次のように説明しています。「ギリシアのベッドは <クリネ> と呼ばれ、4本の角型の脚でフレーム(わく)を支え、頭のほうに頭架(=頭を置く台)を備えた形式です」。このようなクリネ

に寝かせたまま運んで来たという非常識な行為を咎めるどころか、その行為の中に、イエス・キリストは病人を連れて来た人々の信仰を発見なさいました。そして、藁布団に寝たままの半身不随の病人を、イエス・キリストに癒していただくよう運んできた人々は、この病人を病気のままにして放っておけなかった人々です。この人々と病人の関係について、聖書は何も言っていません。彼らが親しい知人同士であったとか、友人同士であったとか、そういうことは一切語られていません。ただ、人々が病人を運んできたと書いてあるだけです。ここで、私たちは想像を逞しくして、彼らは友人だったから、あるいは親戚だったから、そうしたのだろうと言うかもしれません。もし私がそう言うなら、そう言った途端に、私が友人や親戚でなければ、悲惨な病人を放っておくような人間であるということを露呈するだけのことです。むしろ私たちはここで、ルカによる福音書 10 章 30 節以下の、あの「善きサマリア人」の話の思い出すべきでしょう。あの話で、エルサレムからエリコに下っていく途中に強盗に襲われて半殺しの目にあった悲惨な被害者に対して、過剰とも思える助けの手を差し伸べたのが、あろうことか被害者に敵対する民族のサマリア人であったと、イエス・キリストは物語っていました。では敵対する民族であったのに、何故あのサマリア人は被害者を助けたのでしょうか。それについては、ただ一言、理由にもならない理由が示されていました。即ち、あのサマリア人は「その人を見て憐れに思い」、過剰とも思える助けをしたのです。本日の箇所でも、病人を連れてきた人々が病人に敵対する人だったとは思えませんが、中風の人をクリネに寝かせたまま運んで来たという過剰な行為は、偏に彼らが病人を「憐れに思」ったからにちがいません。なお、サマリア人が「憐れに思」った、あの「憐れに思う」という語は、「スプランクニゾマイ」というギリシャ語は、「はらわた」を意味する名詞から出来た動詞です。直訳すれば「はらわたする」となりますが、「はらわたがふるえるほど憐れに思う」と理解すればよいかもしれません。本日の箇所でも、人々がイエス・キリストがたくさんの病人を癒しておられるという評判を聞いて、半身不随の病人を病気のままには放っておかず、クリネに寝させたまま運んできたという一見すると非常識な行為をしてしまったのは、ただただこの病人を「はらわたがふるえるほど憐れに思」ったから、と言うほかありません。この半身不随の病人に向けられた彼らの配慮は、人波に阻まれたくらいで諦めてしまう程度のもではありませんでした。彼らはすぐに止めるような逃げ腰で、件の病人に関わったのではなかったのです。

ところで、同じくマタイによる福音書9章2節の「その人たちの信仰を見て」という言葉の「その人たち」とは誰のことでしょうか。カルヴァンは、あの1500年代に既にマタイによる福音書、マルコによる福音書、ルカによる福音書を並べて読んで、イエス・キリストの言葉を比較検討した人ですが、今しがたの問題について、次のように書いています。「『彼らの信仰』という言葉には、部分でもって全体を示す提喩法と呼ばれている比喩がある。というのは、キリストは中風を患っている人を運んで来た人々を見ておられるだけでなく、彼(=病人本人)の信仰を見ておられたのである」。人文学の教養を身につけていたカルヴァンらしく、「提喩法」などという修辞学の術語を使ってなかなか巧みな解釈です。そして、カルヴァンのような解釈をする人は現代でも少なくありませんが、私はこの解釈に断固として反対です。すなわち私は、この「その人たち=彼ら」とは、半身不随の病人をクリネに乗せたまま運んで来た人々を指すだけだと考えます。何故なら、ここではこの病人の罪が問題にされない代わりに、彼の信仰も問題にされないはずだからです。この病人は、ただ彼を助ける人々の愛の対象として登場しているだけです。ここでは、あくまでも、病人をクリネごと運んだ人々の、その正に半身不随の病人に向かった愛の配慮が、イエス・キリストによって「信仰」として認められたことがテーマです。そして、「その人たち」の一見非常識とも思える行為の中に「信仰」を発見なさったイエス・キリストは、ご自身も又、当然の如く半身不随の病人を愛しなさいました。その愛の極みが、同じく2節のこの病人に向かって発された、「子よ、あなたの罪は赦される」という言葉であり、また6節の「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」という言葉であったのです。イエス・キリストは、その場に居合わせた数人の律法学者が、半身不随で苦しんでいる病人に対して、罪があるからそのような病気になったのだと考えていたのを見抜いて、そんな罪など「赦される」と仰ったのに違いありません。ですから、イエス・キリストのこの病人に対する愛が最も強烈に現れているのは、「起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」という言葉だったと言えるでしょう。それは、正に半身不随の病人の未来を開く、希望に満ちた言葉でした。

さて、本日の箇所に住合わせた数人の律法学者は、不幸な病人を放っておける人々でした。目の前に半身不随の病人が連れてこられ、その人に向かったイエス・キリストの愛が「子よ、あなたの罪は赦される」という言葉になって現れたのを、この律法学者たちは身近に聞くことができたので

す。しかし彼らは、その不幸な半身不随の病人の苦しみを、イエス・キリストと心を同じくして配慮することができませんでした。それどころか、彼らは、病人を愛したイエス・キリストの粗探しをしています。確かに律法学者たちの理屈からすると、イエス・キリストは神を冒瀆していることになるでしょう。彼らは一見正しいことを言っているようです。しかし彼らは、その実、半身不随の病人の苦しみなんぞ、どうでもよいとばかりに放っておける自分の残酷な本質を露呈しています。病人を運んで来た人々やイエス・キリストの愛の対極に位置して、この律法学者たちは「悪い思い」を持っていたのでした。

本日の箇所、最も大切なことは、この中風の人を赦すかどうかなどということではありませんでした。この中風の人がこれまでも、又この時現在も、いかに悲惨だったか、いかに苦しみ続けてきたかだけが、この場の唯一の問題でしょう。この人は、今や全ての人々によってその病が癒されるように祈ってもらう必要のある人だったのです。この場で、そのことのみを目を向けないこと、それこそが「悪い思い」です。この中心をずらしてはならないでしょう。この場の律法学者たちは、まことしやかな顔をして、自分たちが「悪い思い」を抱えていることなど思いもよらずに、その実きっちりその中心をずらしています。

ここで私は、バートランド・ラッセルがその自叙伝の「私は、何のために生きたか」と題された序文で書いている言葉を思い出します。曰く、「単純であるが、圧倒的に強い3つの情熱が、私の人生を支配した。それは、愛へのあこがれであり、知識の探求であり、苦しんでいる人に対する抑えがたい共感である。」

この三つの中で、愛については、彼があつたT・S・エリオットの妻と愛人関係にあつたなどということを出すと頷けるところです。第二の知識の探求については、彼の哲学的業績を一瞥しただけで言わずもがなです。私が感動するのは第3の「苦しんでいる人に対する抑えがたい共感」に彼が生涯支配されたという事実です。この言葉を読んで、私はこの哲学者に深い尊敬の念を抱かざるを得ません。彼は人々の苦しみについて序文の後半で次のように説明していました。

「常に、哀れみは地球へ私を連れてきた。苦痛の叫び声のエコーは、私の心において反響する。飢饉に苦しむ子どもたち、圧制者に苦しむ犠牲者、子どもたちに放り捨てられた老人の孤独、貧困等々、を見聞きするたびに私は苦しむ。これが私の人生であつた。」

このバートランド・ラッセルの第3の情熱こそ、本日の箇所^の律法学者の「悪い思い」の対極に位置する思いです。そして、それこそ、本日の箇所^の病人を床に乗せたままイエス・キリストの前に運んできた人々の情熱と同じものです。何はなくてもこの情熱をこそ、私たちはイエス・キリストから、何とかしていただき続けたいものです。

祈り 神様、人の幸せを親身になって願うことのない「悪い思い」を抱きかちな私たちを私たちに、人の幸せのみを願う良い恩いを与えてください。この祈り、主イエス・キリストのみ名によって御前におささげ致します。アーメン。